

宮崎で開催された秋季大会のいきさつ

山内 誠* 〈宮崎大学工学部 yamauchi@astro.miyazaki-u.ac.jp〉

1. はじめに

2016年9月末の秋季大会も終え、日常の大学業務に追われていた11月初め、学会からメールが届いた。実行委員長として統括にあたった本人として、宮崎の学会全般について書いてほしいとの依頼である。すでに大会の記憶は薄れてしまっていたので、過去のメールを見ながら、何とか記事を書くことにした。

2. 開催断念

初めて学会事務局の千崎さんより、宮崎大学での3年後の大会開催を依頼されたのは2010年のことであった。私自身は日本天文学会2002年秋季年会を開催地理事として、また2003年日本物理学会秋季大会を実行委員会副委員長として担当した経験がある。これらはともに宮崎シーガイアで開催した。ここなら会場の準備はすべて任せっきりにできるため、日本天文学会の年会については、委員会を組む必要もなく1人で担当することができた。しかし2003年の大会は日本物理学会としては予算オーバーだったらしく、千崎さんからは宮崎シーガイアではやらないでくれと釘を刺された。

素核宇宙の大会の参加者は1,000人規模で、教室数もそれなりに必要である。宮崎大学で大会を開催するには、教育文化学部が管理している多くの教室を利用することが不可欠である。早速、教育文化学部の教務に、教室利用について相談に行った。しかし、「教室の利用は当該年度の春に決定するので、3年後の利用について決めることはできない」との回答であった。こんなことでは、どの学会も開催できないではないかと交渉したが、頑なに拒否された。仕方がないので、教育文化学部の元学部長（本会会員）と相談したが、「教育文化学部はチャイムを止めるのさえ教授会の承認が必要なので難しい」と言われた。次に教育担当副学長（理事）に相談したところ、全面的に協力すると言っていたが、開催が3年後であることを伝えると、「理事の任期後なので、どうしようもない」と言われた。これで万事休すである。宮崎での大会開催を諦めざるを得なかった。

3. 懲りない学会事務局

もうこれで、少なくとも私の在任中に宮崎での大会開催依頼はないだろうと考えていたが、前回の依頼から3年後に再び千崎さんから依頼が来た。今回も無理だろうと思いつつ、まずは教育文化学部へ相談に行った。前回と違って

いたことは、教育文化学部だけでなく、農学部、工学部ともに教務係長が、私の知り合いに交代していたこと、私自身が教務担当副学部長になっており、他学部の教務担当副学部長と知り合いになっていたことである。どちらが効いたのかはよくわからないが、今回はスムーズに教育文化学部教授会で3年後の教室利用を認めていただいた。こうなると、農学部、工学部の教室利用は早いもの勝ちのシステムなので、あっという間に教室を確保することができ、開催2年半前の4月の理事会にて宮崎での大会開催が決定された。会場が確保できたので、もう安心…のはず。

4. 大学改革の流れの中で

ほとんどの大学がそうだが、宮崎大学の学期制は前期、後期の2学期制である。文部科学省からの答申を受け、柔軟な学期制度の検討が始まり、宮崎大学では第3期中期計画期間中に4学期制を導入することが決まった。検討状況によっては、秋季大会期間と講義期間とが重なってしまう可能性もあった。全くの偶然ではあるが、私は2015年9月に学内で立ち上がった「4学期制実施専門委員会」の委員を（しがらみの中での自己推薦で）引き受けることになった。委員会では2016年度から9月20日頃に夏休み明けの講義を開始するという案も出たが、これは幸運にも回避され、胸を撫で下ろした。

5. 宮崎大学へのアクセス

会場確保と同時に検討を進めていた大きな課題は、宮崎大学へのアクセスである。宮崎大学の最寄り駅は2 km以上離れており、電車は多くても2両編成で、ダイヤも1時間に1本あるかないかである。そこで、バスやタクシーをいかに利用するかということになる。

学会などを開催する場合、宮崎観光コンベンション協会が協力してくれるとともに、窓口となって、県と市から最大で300万円もの補助金を準備してくれる。ただし補助額は、学会が支払う補助対象費用の半額が限度である。これを利用して、ほとんどの参加者が利用するであろう宮崎空港から大学、もしくはホテルが集中している市街地から大学へのバスのチャーターを考えてみた。が、1,000人近い参加者の移動を考えると、補助金を考えても予算オーバーとなる。ならばと、チャーターではなく路線バスの臨時増便をお願いするが、路線バスを運行している宮崎交通からは、対応するだけのバスの余裕がないとの回答（この時は）で、なかなか進展はなかった。

代替案として、旅行会社がタクシーの割引利用を提案してくれた。そこで、4人利用であればバスと同等以下の料

* 実行委員会委員長

金となるよう交渉をお願いし、十分な台数を準備していただくという方針で進めることにした。

ところが、2016年度になってコンベンション協会の担当者が交代し、宮崎交通から出向されている方になった。早速バスについて相談すると、宮崎交通への依頼がすぐに通り、こちらが考えていた以上の対応をしてくれ、毎朝、様子を見ながらのバスの増発や増便のほか、初日と最終日の空港-大学間のダイヤ設定が実現した。

こうなると、主力と考えていたタクシーの方は、集客が見込めなくなったので特別料金の設定や主要場所での待機、準備台数の増加はせず、割引券による割引のみに対応すると連絡してきた。

6. 本番に向けた追い込み

実行委員会は2年半も前に立ち上げた。メンバーは10人しかいないので、図1左のように副委員長を置かず、一部の係を兼任という形で割り当てた。各種サポート係は学務の忙しい人をお願いした。委員会が本格的な準備を始めたのは、5ヵ月前くらいである。私自身も校舎建物配置図を一生懸命きれいに作った。が、結局は業者が作るので、適当に作っていてもよかったようだ。案内看板のレイアウトや設置場所、ビラの貼り付け場所の検討などは、思った以上に忙しそうで、今思えば図1右の方がよかったと思う。託児室、インターネット、市民科学講演会等の準備も動き出し、各担当委員が綿密に仕事をこなしてくれたので、委員長としては安心して任せることができた。

今回一つチャレンジしたのが、昼食時にキッチンカーを導入したことである。1年ほど前からキッチンカーの乗り入れ、学内での営業について大学施設課と相談し、実行方法を検討していた。すると、施設課は学生向けのサービスとして、2016年7月から8月にかけてキッチンカー導入の試行をしてくれ、我々はそのままの方法で実施することができた。大会期間中1日だけの導入であったが、私は集客具合が心配で昼休み中ずっと様子を見ていた。結果は、多くの方々にご利用いただき大盛況であった。学会参加者の一部からは、「もっと早く提供できるものを選べばいいのに」という声もあったようだが、今回は移動販売車協会に声をかけ、当日出店可能な4台に無償で協力してもらったので、そここのところはご容赦いただきたい。

宮崎での割り振り	こっちの方が良さそう
委員長	委員長
庶務係	庶務係
会計係	会計係 兼
講演会場係	休憩室・昼食係
アルバイト雇用監督係	講演会場係
託児室係	アルバイト雇用監督係
休憩室・昼食係 兼	託児室係
案内看板・ビラ係	案内看板・ビラ係
インターネット係 兼	インターネット係 兼
ホームページ係	ホームページ係
市民科学講演会係	市民科学講演会係
各種サポート係	各種サポート係

図1 係の割り振り。

7. 台風襲来

会期前日の20日未明に台風16号が宮崎を襲った。もちろん宮崎は台風の通り道なので、以前から心配はしていた。しかし自然現象に逆らうことはできないので、我々としては何ともできない。前日準備に集合した実行委員の1人は、床まで水に浸かった車でやってきた。20日に宮崎に移動する予定の参加者もやきもきしたことと思う。参加者の中には予定を変更した方も多かったのではないだろうか。宮崎での大会実施にあたり支援いただいた旅行会社さんも、飛行機の予約変更等、対応に追われたようである。結局は、台風が予想以上に早く通り過ぎたので、予定変更しなかった方が正解のようであったが。

8. 突然のタクシー

多少の小さなトラブルはあったものの、大会はほぼ平穩に進行した。ただ一番焦ったのは、学会初日、午前中の受付作業も思いのほか順調に進み、ついに始まったと実感していた午後である。いきなり本部に「待機場所はどこですか」とタクシーの運転手がやってきた。聞くところによると、これから数十台は来るとのこと。タクシーの待機はしないと聞いていたので、そんな準備はしていない。かといって、せっかく来てくれたタクシーを放っておくわけにもいかない。幸い、バスの待機場所として駐車場をかなり広めに確保していたので、そこに待機してもらうことにしたが、駐車場のシェアについて宮崎交通を説得するのに苦労した。でもまあ、バスが大量に待機しているので、タクシー利用はほとんどないと想像し、2日目以降、タクシーは来ないだろうと思っていたが、意外と参加者は利用されたようで、次の日もホクホク顔でやってきた。

9. 大会を開催して

大会開催に関して、あまり苦労したという感想は持っていない。ただ、以前から感じていたことだが、準備の中で特に面倒なのは、会場確保に向けたいろいろな学部との交渉、手続き、会場の準備、案内看板・チラシの設置、トラブル対応である。コンベンションセンター等を利用できれば、この部分が劇的に楽になる。予算の問題もあるが、地元での契約であれば、より安くできる可能性もあるので、学会事務局として柔軟に対応していただければと思う。

とはいえ、今回は大きなトラブルもなく大会を終えることができた。これは大学関係者や学会事務局のほか、県、市、企業が「オールみやざき」という立場でサポートして下さったおかげである。ここに感謝の意を表したい。

10. 最後に

大会期間中、市内繁華街にはチェックのシャツにデイベック姿の人達が急増したそうである。また、ちょっとした居酒屋に少し遅めに行くと、「例の学会のおかげで、食べ物なくなったから飲み物だけをお願いします」と言われたらしい。はて、例の学会とは？

(2016年12月2日原稿受付)

金沢で開催された秋季大会の裏話

藤下 豪 司* <金沢大学国際基幹教育院 fujishit@staff.kanazawa-u.ac.jp>

1. はじめに

2016年秋季大会(物性)を、9月13日から16日の日程で金沢大学角間キャンパスを会場として開催した。統括に当たった実行委員長として、大会全般の様々な問題やエピソードなど、会員に興味のありそうな事柄について、総括的なエッセイを依頼された。発表者や聴講者として参加しているだけでは知り得ない苦勞もあり、知らないが故に過大に受け止めてしまうこともあると思われるので、今後に役立てられればと思い依頼を引き受けることにした。

2. 開催の受諾まで：96年年次大会の苦い記憶

筆者が物理学会北陸支部長をしていた2012年12月に、本部から、「金沢大学で、2015年の、または17年以降の、年次大会の開催を検討していただきたい。必要な教室の大きさと数は以下の通りです」という依頼を受けた。96年年次大会の実行委員を経験した筆者ら年配の教員には、後述するような交通問題についての苦い記憶があったので、困ったことになったとは思ったが、とにかく角間キャンパスで使用可能な全教室を調べた。その結果、年次大会の開催は到底不可能との結論に至り、本部にも認めていただいた。これで筆者の定年までに大会が開催されることはなくなった、はずだった。しかし2013年9月に、改めて、「2016年以降に、物性関係秋季大会の金沢大学での開催を検討していただきたい。秋季大会なら開催できるはずです」との依頼を受けた。

96年年次大会では角間キャンパスが物性関係の会場になり、角間キャンパスからバスを乗り継いで50分程の距離にあった小立野キャンパスが、素核宇宙関係の会場となった。参加者は4,200人程度と記憶しているので、角間キャンパスへの参加者は3,400人程度と推測される。

この大会から運営方法が変わったことがあった。臨時バス運行の交渉が、実行委員会から旅行者に変更になったのである。そのため、実行委員会では臨時バスの運行計画を把握していなかった。この大会は、角間キャンパス移転後、初めての大きな大会だったため、旅行者・バス会社ともに臨時バスの運行に慣れていなかったこともあった。その結果、寒空の中、バス停に1時間以上並ぶという事態になり、大会本部に怒鳴り込んでくる参加者も少なくなかった。実行委員会では、慌ててタクシー会社に角間キャンパスへの集中配車を要請するとともに、翌日からの臨時バスの増便を依頼した。当日の混乱は19時頃まで続いた。

現在では物性関係の参加者は4,000人程度になっており、さらなる混乱が予想された。他の理由も挙げて開催を固辞し続けたが、結局、最も早い時期の開催を受け入れることになった。受け入れ決定後、知り合いに「金沢大学で秋季大会を開催することになった」と話すと、「20年前はひどかった、今度は大丈夫なんだろうな」と釘をさされる始末であった。

3. 会場関係費用など：不測の事態

本部から、期待できる補助金の額、臨時バスの運行・警備費を含む会場使用料の概算額を調べるように依頼された。2013年9月に角間キャンパスで、2,700人が参加する、金属学会・鉄鋼協会合同大会が開催されたので、交通担当実行委員に実情を聞きに行った。希有なことのようなのであるが、臨時バスには、乗車運賃とは別に、一便ごとに出動料が必要とのことであった。実際の臨時バス運行表もいただいた。4,000人参加の場合、予定されている消費増税を考慮しても、出動料は最大300万円であり、石川県と金沢市から、補助金とは別に、合計で、この半額が補助されることがわかった。(2016年には出動料は減額され、消費増税は先送りされた。)担当した旅行者とは接触しなかったが、直近での担当経験のある業者の存在は心強いことである、はずだった。

角間キャンパスの施設使用料については、講演プログラムが決まらなと使用する部屋が決められないので、使用しない部屋の料金も支払うことになる可能性があった。その場合でも、県と市の合計の補助金480万円には至らないので、「臨時バスの運行・警備費を含む会場使用料」についての自己負担額が100万円を超えることはないとの見通しが立ち、開催が正式に決定されることになった。

旅行者選定の入札は、本部が大手3~4社に案内を出し、1次評価は本部が行うとのことであったが、実際に入札案内を送る直前に事件が起こった。前記業者の他県支店員が業務に関することで逮捕されたのである。結局、新たな業者にも案内を出し、応札した業者と面接して大丈夫と確信できる業者に委託した。

旅行者を介したホテル予約には団体割増し料金が上乘せされるようで、webサイトで容易にホテルの予約ができるようになった現在では、多くの部屋を確保するのはリスクが大きいというのが、2014年初め頃の業者の見解であった。その後、北陸新幹線延伸への期待による金沢ホテルバブルが生じ、2014年末には、すでに、1部屋平均1,000円以上値上がりしたとのことである。さらには、全国的にも、

* 実行委員会委員長

慢性的にホテルが不足する事態になったようである。

臨時バスの増発は要求し続けたが、回答は常に渋かった。開催1月前のバス会社との直接交渉でも、「運転士の確保が困難」との回答であり、少なからぬ混乱も覚悟したが、杞憂に終わったようである。直前でないと決まらないことをバス会社も確約できないのではあろうが。

4. 運営について

実行委員会のやるべき仕事の内容とスケジュールについては、「大会準備・開催マニュアル」が整備されており、準備と運営について戸惑うことはなかった。本部からの催促で慌ててマニュアルを読んで準備しても何とか間に合わせられた。それを見込んで催促しているのではあろうが。

昼食・弁当販売実績数一覧と会場出席者数（日毎の参加者数一覧）は食堂の営業に特に役立った。生協には学期期間中とほぼ同様の営業をしていただいたおかげで、食堂に並ぶ行列は、予想に反して、学期期間中に比べて遙かに短かった。

マニュアルにはまだ記載されていなかったが、eduroamを使用した、第70回年次大会（早稲田大）インターネット系の報告書も役に立った。参加者数と臨時ID申請者数から、必要な臨時ID数を1,000と予想し、念のため1,500用意したが、申請数は予想通りであった。

講演会場については、当初、自然科学本館と総合教育棟での開催が検討された。しかし、「大きな教室が良い」とのことで、プログラム編成で、より離れた、人社系講義棟を使用することになったとのことである。このため、プログラムを組むのは例年に比べて容易だったようである。しかし、両会場の玄関は歩いて10分の距離なので、講演会場によっては移動に20分近くかかる場合もある。両会場の往復を繰り返した参加者は、歩数が1日2万歩を超えたとのことであるが、日頃の運動不足を解消できたと思っただきたい。

予想以上に困ったのが、プロジェクターとPCの不適合である。準備日に全てのプロジェクターについて、WindowsとMacで動作確認を行った。しかし当日には頻繁に不調が起こり、用意した予備機が出払ってしまうこともあった。不調は、ケーブルなどの接続不良や操作ミスもあったが、原因不明なことも多かった。特定のOSのバージョンで起こることも限らないようである。

5. 謎の階数表示

ほとんどの参加者は気にもとめなかったことであろうが、総合受付の2階上の、吹き抜け手すりに、「ここは1階です」という不思議な横断幕がある。つまり玄関から入った階はG2Fである（このことはプログラム前付に記載しておいた）。5層ある自然科学本館は、3層目で研究棟最下層の1階と接続しているので、3層目を1階としているのである。安全上、託児室は会場配置図には示さず、方向案内も出さ

ず、総合受付で事前利用申込者のみに場所を教えているのであるが、初めのうちは迷う利用者が続出してしまった。

6. 市民科学講演会

秋季大会開催に合わせて市民科学講演会が開催されていることは承知していたが、実行委員会の役割は会場の確保だけで、企画運営は本部の委員会が行うと思っていた。しかし、50万円の予算で全てを実行委員会が行うとのことであった。高校生や一般市民向けなので土日祝日開催となるが、交通問題があるので、市内中心部の会場で行うことにした。2014年ノーベル物理学賞が「青色発光ダイオードの発明」に贈られたので、天野浩名大教授に講演をまず依頼してみることにしたが、2015年年次大会を始め、多くの学会・大学で講演が行われているようなので、状況が落ち着くまで行動しないでした。

2015年7月頃になって、1年前には会場は大分予約されてしまっていることを聞き、慌ててキャンセル可能な会場をいくつも予約した。講演申込は、名古屋大学webサイトの専用ページでのみ受け付けていて、すでに2016年9月以降の講演のみを受け付けていた。慌てて申し込んだが、第一希望日の講演を了承していただいた。

ポスターとチラシを作成して配布することにしたが、Wikimedia Commons ライセンスの東京スカイツリー画像を使用しないようにとの指摘をいただいた。そこで東京スカイツリーライセンス事務局とパナソニックに画像使用許可を求めてみた。講師が天野教授であるとのことで、提供された画像をそのまま、指定されたクレジットを入れることで、特例として使用を許可していただいた。

作成したA2判ポスターとA4判チラシを、北陸3県の高校、石川県の大学・図書館・公民館などに合計250部郵送した。当日の参加者は、予想に反して、学生は少なく一般市民が多かった。講演は、ノーベル賞発表時に本人に連絡が取れなくて大騒ぎになった裏話から、現在進めている途上国向けの安価な飲料水殺菌システムの開発まで、一般市民でなくとも興味深い内容であった。

7. おわりに

大会自体は、始まればあっという間に終了したという印象である。病人・けが人が出ることもなく、台風に襲われることもなかったので、実行委員会はひと安心であった。30人の学生アルバイトが、1人の遅刻も欠勤もなく、そつなく業務を遂行したことには感心した。彼らの力により、大会が円滑に運営できたことも事実である。

編集委員会の依頼とは異なり、金沢大学に特有の事柄についての記述が大半になってしまった。これは、それ以外の準備や運営については、特段のことがなかったということでご容赦願いたい。もちろん書けないことも少なからずあるのではあるが。

（2016年12月2日原稿受付）